

絆 求 め て

5月8日発行

文責 幼児教育専門員 久保田学



資質向上講座「講演会」を実施しました！

令和6年4月17日(水)、駒沢女子短期大学 保育科教授 猪熊 弘子先生を講師としてお迎えし、資質向上講座(講演会)をWEBで実施しました。テーマは、「不適切保育・事故を防ぎ、より良い保育のために必要なこと ～組織作りと保育者の学びを大切に～」です。子どもの人権を守り安心・安全な保育のために、私たち保育者が大切にしていきたいことについて、具体的な事案を紹介いただきながらご講義いただきました。園での活動が一段落した16時からの研修だったこともあり、357名と大勢の先生方にご参加いただくことができました。以下に研修後のレポートでお書きいただいた内容を紹介いたします。

<研修から学んだこと>

- 日々の保育について、大切なのは振り返り。人権擁護のためのチェックリストをもとに振り返り、言っ
てはいけないことなどに気づけることが大切である。子ども主体の保育をしていれば、不適切になりよ
うがない。ただし、放任や放置は自由や主体的ではない。自由と放任をはき違えてはならない。不適切
な保育が重大な事故につながっている。見失い事故の怖さ。見失いに+αが加わることによって重大
事故となる。過去の事故も、見失いに何か重なり死亡事故につながってしまっている。子どもの把握
を、一日の中で確実に行うことが重要となる。「スイスチーズモデル」のように、各々が最大限でき
ることをすることで最悪の事態をどこかで止めることができる。
- 重大事故や不適切保育が起らないようにするためには、毎日の保育の振り返りを必ず行い、振り返
りから得られた発見や悩みを他の保育者と情報共有することが最も重要である。日々の保育の振り返
りは、子どもの人権が守られているかどうかの観点を中心に細かく行うことが大切であり、更に主観だけ
でなく第三者の意見(周りの保育者やチェックリスト等)をきちんと取り入れて行うことで、ダブルチ
ェックになり、より質の高い振り返りになる。
(*一部文章を変更しました)

<今後の保育実践に生かしたいこと>

- 日々の保育の中でチェックリストを元にしながら職員同士で話し合う時間を定期的に設け、意識を統一
しながらより良い保育をしていきたい。「子ども主体」ということを改めて意識し、安全に過ごしてい
けるようリスクに対してしっかりと対策をしていきたい。暑さ指数計の使用、食事ガイドラインの把握、
ピアノキャスターなど、細かな部分にも目を向け子どもの安全を守っていきたい。特に熱中症に関して
は園できちんとした基準を設けていき、水筒の容器など家庭とも相談しながら調整していきたい。又、
子ども達と話し合い、みんなで基本的なルールを考えながら、自由な安全の中で主体的に楽しんで過
していきけるよう取り組んでいきたい。
- 年度の初めに、子どもの安全を考える良い機会となったと思う。子どもの事故や怪我に対する危険性を
考えると、その危険はどこにでも潜んでいる。それを全て排除してしまうと、安心してしまい、子ども
を見るのがなくなってしまうのではないか。そういう意味では、最後に「自由度のある安全を守って
いく」という言葉がとても印象に残っている。自分自身は大丈夫と過信せず、自分の行動や言葉、対応
を振り返ること、自分を第三者的に振り返ること、そのことを現場の先生達と再確認していきたいと思
う。そして、子どもの体の安全、心の安全を確保し、安心して生活できる場所としての幼稚園になるよ
うにしていきたい。
(*一部文章を変更しました)

皆さんは、「肩車にのって」という本をご存じでしょうか。毛涯 章平 先生の随想集です。毛涯先生は、県内各地の小
中学校に勤務され、最後は下伊那郡豊丘村教育委員会教育委員長を務められた方です。4月、ある園を訪問した折、園長
先生が、職員会議での資料として毛涯先生の「わが教師十戒」を出されるとお話をいただきました。私も小学校に勤務し
ている時、この「わが教師十戒」を先生方に紹介したことがありました。教師として子どもと相対する上での、大切な
姿勢と思い、紹介させていただきます。 *裏面参照 (専門員)

年度当初にあたり、子どもたちとの接し方のよりどころとなる「教師十戒」を読んでみましょう。ハッとすることがあります。

「教師十戒」

毛涯章平著 『肩車にのって』より

- 一 子どもをこばかにするな。教師は無意識のうちに子どもを目下の者と見てしまう。子どもは、一個の人格として対等である。
- 二 規則や権威で、子どもを四方から塞いでしまうな。必ず一方を開けてやれ。さもないと、子どもの心が窒息し、枯渇する。
- 三 近くに来て、自分を取り巻く子たちの、その輪の外にいる子に目を向けてやれ。
- 四 ほめることばも、叱ることばも真の「愛語」であれ。愛語は、必ず子どもの心にしみる。
※「愛語」…相手の身を思いやって語ることば
- 五 暇をつくって、子どもと遊んでやれ。そこに本当の子どもが見えてくる。
- 六 成果を急ぐな。裏切られても、なお信じて待て。教育は根くらべである。
- 七 教師の力以上には、子どもは伸びない。精進を怠るな。
- 八 教師は「清明」の心を失うな。ときには、ほっとする笑いと、安堵の気持ちをおこさせる心やりを忘れるな。不機嫌、無愛想は、子どもの心を暗くする。
※「清明」…自然で明るく、ゆったりすること
- 九 子どもに素直にあやまれる教師であれ。過ちはこちらにもある。
- 十 外傷は赤チンで治る。教師が与えた心の傷は、どうやって治すつもりか。